感性の輝き…。

私たちは日々の臨床において患者・家族と接する中、何を感じ、何を共有しながら相対しているのでしょうか？

「感性」という言葉を辞書で調べると物事を心に深く感じ取る働き。感受性。「―が鋭い」「豊かな―」と書かれています。感性というのは文献などによる学問として身に付くものではなく、また、知識として広く共有できるものでもないと考えます。

しかし、この「感性」というものは私たち医療に携わり、人の尊さを重んじる立場にある者としてはしっかりと相手の気持ちを理解し、対応すべく備えておくべきものとも考えます。

今回、個々人がどのような思いで臨床に臨み、また、どのような出来事に感動しているかを文章にまとめ、冊子という形で表すことにより、教えたり、伝えたりすることがなかなかできないこと・・・。

そう、「感性」を磨いてみてはいかがでしょうか？

平成23年2月16日発行

編集：小倉リハビリテーション病院　リハビリテーション部

H25.5月　ホームページ掲載にあたり、一部修正しております。

「兄弟や夫、息子にも先立たれ、家族と呼べる親族は独りもいない」と言われていた90代女性。入院した当初は今後の生活に不安を感じていたものの、日が経つにつれスタッフとも笑顔で話すようになっていきました。しかし、退院の日になると「また、独りになってしまう」と涙を流すことが多くなっていました。退院後、施設を訪ねる度に「待っていたよ。私の事を覚えてくれている人がいて嬉しい」と明るい表情で泣きながら迎えてくれています。その人の人生に携わるという責任と、この仕事を目指したきっかけを再確認させられた出来事でした。

重度の右片麻痺・失語症重度を追いながらも自宅生活復帰を唯一の希望にリハビリに励む姿の横で常に毎日寄り添う妻は二人で暮らすことが当たり前と考えていた．介護能力への不安から息子とチーム間で施設入所が決定．妻は「一緒に帰って生活できると思っていたのになぜ駄目ですか？」と塞ぎ込んでいた．当たり前のように一緒にいた夫婦が選択せざるを得ない結果であったが，どのような状況にあっても二人での暮らしを望む妻へ我々は十分な支援ができたであろうかと考えさせられた。

入社して１年目で毎日目の前のことだけで必死になり、しっかりと患者様の力になれているのか自信がなかった。ある日、退院の近い患者様に涙ぐみながら見つめられ、どうしたのか尋ねると、「あなたの顔を忘れないように目に焼き付けている」と言われた。自分では患者様の力になれているのか今でも自信はないが、患者様に忘れたくないと思ってもらえた事は仕事のやりがいを知るきっかけとなった。

片麻痺の患者様とそのご家族。入院時、家族仲はあまり良いとは言えず、ご家族の方からもできれば見舞いには来たくないと話される程だった。そんな中、総合説明の為来られたご家族の方へ、入院時からの変化を確認していただく為に、患者様の歩行状態を見て頂いた。患者様が必死に歩かれている姿を最初はあまり見ようとはされなかったご家族の方も6歩、7歩と歩かれた際には涙を流されて喜ばれ、そんな光景を目の当たりにして私自身、目頭が熱くなった。入院はつらい生活ではあるが、そんな中でこそ家族の絆が確認しあえるものだと感じた。

失語症の患者さんで、自宅へと退院された人。文章の理解の改善のために、理解課題を行っていた。ある日、いつも行っている課題を実施した際、「いつも笑顔でやってますが、私には負担になっていて、きついと思うことも多いです。」と言われた。笑顔で行っていても、実際に感じていることは違い、そういう心理的負担を考える機会となった。

進行性疾患の患者様。現在は、再発を繰り返し、生活全般に介助を要する状況。病気になって一番辛かったことは、「自分の体が悪くなることよりも、息子の高校受験を母親として支えられなかったこと」だった。その人の強さに深く感動した。

重度の高次脳機障害があり、生活全般に介助が必要な状況であった70代の女性。在宅生活に向け大変な事が予測されていた。その中で夫より「今までは自分が仕事で忙しい中、妻は私を全力で支えていてくれた。だから今度は、妻に旅行をプレゼントするような気持ちで、毎日妻の介護をしていきたいと思っています」との言葉に家族の絆や自分のためでなく人を思いやる心に深く感動した。

退院後利用するサービスの検討を夫と行っていた際、サービスの利用は週1回にしてほしいとの希望があった。その理由について、「妻と2人の時間をもっと作りたい。2人であちこちに行くのが夢だった。」と涙を浮かべながら説明された。長年連れ添った夫婦の絆を強く感じ、リハやサービスの検討には患者様とご家族のおもいを尊重する必要があると改めて実感した。

入院からしばらくリハ拒否が続いていたある日、娘さんから「お父さん、いつまでこんなことを続けるの？またみんなで一緒に暮らせるように頑張ろう。お父さんが帰ってくるのをみんな待ってるから！！」と泣きながら訴え、リハ拒否が少しずつ減り今では自宅で家族と生活を送っている。家族の絆を感じさせてくれ、これから在宅へ向け取り組む本人と医療相談員自身に自信を持たせてくれた娘さんの言葉が今でも印象深く残っている。

病前から活動的な生活をされており脳梗塞を発症した女性。入院当初「歩けない事がこんなに悔しいとは」と涙される場面に出くわした。しかし、リハビリにも積極的で悲観的な発言もなく過ごされ、退院日「あなたのおかげで歩けるようになりました」と笑顔で言われた。弱音を吐かず悔しさを胸に頑張った姿を見て、改めてリハビリに携わる者としての諦めない姿勢を実感した。

退院後もADLに一部介助が必要な患者様を担当させて頂いた時のエピソード。主介護者である妻は入院時から一貫して在宅を希望されていたが、退院後は妻と二人暮らしをされる予定であり、在宅での介護負担が懸念されていた。家屋訪問の際、妻に今後の生活に不安がないかを聞くと「不安はありますが、今までお父さんが一生懸命仕事をして家庭を支えてくれましたから、今度は私が頑張ります。どこまで頑張れるかわかりませんが、難しい時はまた相談しますのでよろしくお願いします。」と笑顔で話された。それを聞いた私は、家族に共感し、同時に自分の仕事の責任の大きさを考えさせられた。

麻痺と認知症がともに重度である母が、自宅退院となった方の息子。いつも笑顔で楽観的な態度を取られる方であるが、母のことを一番に想い、毎日面会に来られ、家族指導も受け、どのようにしたら2人が生活しやすいか等、今後の2人の生活について真剣に考えられていた。私が同じような場面に直面した時に、このようにできるのであろうか？未だ答えがみつからない…この親子の絆に心を強く打たれた。

会社ではやり手営業マン、自宅では全てを取り仕切る強い夫、そしてお父さん。「情けないよ」「家内が不憫でね」静かに涙を流すその姿に何度も直面した。悔しさ、むなしさ、苦しさ…それを思うと一緒に泣けてきた。でも、妻の前ではいつもの強い夫で前を見つめていた。守る者の前では人は常に背を正すのか。私が同じような状況になった時、子供の前でいつも強くいられるのか？　まだ、私には自信がない。

「帰りたい」と毎日口に出しながら、長期入院でのリハビリに取り組むも、退院後は妻・娘の介助を要する生活。退院直前のリハビリ時、「死んだ方が良かった」と漏らされる。その時に初めて本音を聞けた気がした。言葉に詰まり、励ますことしか出来なかったが、「頑張ろう」と再び前向きに歩まれる姿を見て、一人の方の人生の大きな分岐点に関わらせて頂く中で、自分には何が出来るだろうと改めて考えさせられ、きちんと向き合う重みを感じた。

脳梗塞を発症し、重介護が必要な夫を自宅復帰させたいと願う妻。方針に関する意向確認の際に、「今までお互いに支えあって生きてきたんだから、本人が頑張ってきてくれた分、今後は私が頑張らないとね」との発言を聞いた際に、大変な仕事をしながらも家族を大切に生きてきた本人の人生を感じ、また本人の思いに一生懸命に応えようとされる妻の姿を見て、夫婦の絆の強さを感じた。

“あんなことせんやったら、こんなことにはならんかったのにね…”術部の痛みや禁忌肢位による生活上の制限で、受傷前とは同じ生活を送ることは出来なくなった患者様。そんな思いを抱えながらも毎日前向きにリハビリに取り組まれ、“私が元気がなかったらあなたに心配させるから”と気遣ってくれた。自分が同じ立場だったら、他人を気遣える言葉をかけられないだろう。そんな患者様の寛大さに感動し見習いたいと思った。

急性期病院にて、今後車椅子での生活になると宣言された患者様より、退院間際に頂いた言葉。「君と一緒に最後まで歩くことを諦めないで良かった」この言葉によって、最後まで諦めず努力することが大切だと再認識させられました。

動作は全介助で、食事は嚥下食、重度の構音障害があり、意思伝達が不十分な夫と妻の2人暮らし。通所リハの忘年会で、最近の様子は「先生達のようにはいかないけど、何とか介助のコツも掴めてやっています」と、「食事の準備や介護など大変じゃないですか」というと、「大変やけど、楽しいよ。この人を死ぬまで一生みらんとね。」と笑顔で言われた。介護は大変であっても、在宅生活は継続していくという家族の熱い思いに感動し、その思いに対する自分の軽々しい声掛け、配慮の無さに深く反省した。

入職してからなかなか自分の治療に自信が持てない日が続いていたが、担当の患者様に「あなたが一番リハビリが上手。患者からするとベテランとか新人とか関係ない。あなたとリハビリするとすかーっとするんよ。」と言って頂けたことがあった。リハビリには治療技術や専門知識が不可欠ではあるが、それ以前に患者様の心を動かすのは人としての関わりや繋がりであるのだと改めて実感した体験であった。

外来の難病の若年女性（車椅子利用者）より、「みんなと同じように買い物やカラオケ、居酒屋に行きたいけど店の狭さやトイレなどの環境により制限があり、店を探したり、相手に合わせてもらったりといろんな苦労がある」と話される。自分が健常者であり、また整えられた病院環境の中で仕事をしているので、患者様の訴えで生活や環境の不便さ等にたくさん気付かされることがある。病気や障害、屋内環境など限られた視点に留まらず、たくさんの可能性を考え、いつも広い視点から患者様の事を考える必要があると感じた。

頚損、慢性腎不全の患者様。精神疾患のある次男と介助指導を行っている時、次男に抱えられながら「私たちは2人で1人前」（介助がうまくいき）「さすが親子」と笑顔で話す。腎機能も悪く、本人も在宅生活は不安だったが、40年来共に歩んだ次男の前で優しく振舞う母親の姿を見た瞬間、私の中で自宅生活への不安は少し和らいだ。

私が新人だった頃、30代女性の患者さんから“立てなかった私を歩けるようにしてくれてありがとう。これからもっともっと頑張ります。”という内容の手紙をもらった。数ヶ月前に、その方に会いにいった。退院時、屋外は見守り歩行だったのに、作業所まで約15分かけて一人で通っていた。また、作業所内ではムードメーカー。家では家事も行い、退院時想像していなかったくらいの生活を送っていた。それでも、完全に自立するまでを目標に頑張っていた。自分も頑張らなければと思った。また、モチベーション次第でその人の生活が変わるということを実感し、今でも意識して関わるようにしている。

摂食練習をして食べられるようになったものの、食事の種類、姿勢、一口量に制限がある方から「いろんなことを気にしながら食べてもおいしくない！」と告げられた。自分は一生懸命関わっているつもりだったが、患者さんの気持ちに十分寄り添えていないことに気付いた。その後、一緒に食べることを再開でき、現在も食事内容を相談しながら決めているが、このように関わりあえるのも、患者さんが現状を受け入れただけではなく、患者さんの寛容な気持ちがあったからこそだと思う。リハビリは患者さんと一緒に取り組むものだと、当たり前のことだが、初心に戻る機会を与えて頂いたと思っている。

40代という若さで脳梗塞を発症し、障害に対して前向きに考えておられ、リハビリにも意欲的な患者様の言葉。「この病気になるまで何も考えずに歩けていたのに、思うように動けなくなったことが信じられない。悔しい。だけど、この病気になったのが私でよかった。両親や子供じゃなくて本当によかった。私なら頑張れる。」私にはこのような考え方はできないだろうと思い、胸をうたれました。

60代男性の患者様より、「強がり、から元気、はったりを武器にこれからも頑張りなさい」と言われた。初めはよく意味が分からなかったが、障害をもった患者様と接する我々の仕事では、これらの言葉をうまく使いながら患者様を元気にすることが大事であると最近感じている。現在もこの言葉を胸に日々臨床に取り組んでいる。

重度の失語症の方、重度の意識障害の方のご家族とそれぞれ別の機会にお話しをしている時の出来事である。コミュニケーションについて、お二人とも「なんとなくわかってますから」と話されていた。全く言葉はないが、表情、雰囲気、行動にてご家族はコミュニケーションを図っているという答えであった。普段から、失語症の方に限らず、嚥下障害の方に対しても、“できる”“できない”の評価、判断ばかりしており、その方自身としっかり向き合えていなかったと気付かされたと共に、コミュニケーションは言葉だけではないということを改めて感じた。

頸髄損傷で重度の四肢麻痺。89歳の女性の方です。基本動作からADL全般に介助を要するため自宅復帰は困難との話になり、方針が施設に決まりました。落ち込むかと思われましたが、性格が明るく陽気な方なので、病院ではそのような場面はみせませんでした。しかし、外泊が行える環境かを確認するため訪問に行った際、仏壇の前に連れて行くと大声で「こんな体になってしまってすいません」と泣き崩れる光景を目の当たりにしました。病院では気丈に振舞っていたことに気付けなかったことを後悔したと同時に、障害を持ちながらも人前では明るく振舞う精神力の強さを感じた。

30代の患者様に「健常者には分からない」このような言葉を言われた。リハとして関わる上では患者さんの気持ちを最大限尊重し関わってきたつもりであったが、まだ話しあいや相談が足りなかったのかと悔しい気持ちになった。自分の発言や関わり方一つで患者さんへ希望を与える事もあれば、その逆もあると改めて感じた出来事であり、今後は2度とこの言葉を聞くことのないように関わっている。

重い意識障害を残し全身状態も安定していない患者の家族から「せめて生きていると実感できるようなリハビリをしてほしい」とのお願いがあった。
今まで「生命」というものを感じながら治療することはなかったがこの言葉を聞き、一療法士として「生命を支えるために何ができるのか」と考える機会を得た。後日、家族より「最近ほほ笑むようになった」と言葉を頂いた。
自分自身は変化に気づかず、何がよかったのか答えはまだわからない。療法士が直接延命できるような手技を持つわけではなく無力さを感じることもあったが、一療法士(一人間)としてできることを精一杯行う大切さを学んだ。

20代で高次脳機能障害を有しながら大学復学を目指す。それを支える母親の言葉。「たとえ（卒業まで）何年かかっても良い。大学生活は今後の人生で本当に大切な経験になる。それを家族皆でサポートしたい」私は学力のみで評価し、復学は適当な選択か迷った。それに引き換え母親は、苦労さえ重要な経験と捉え、家族皆で引き受ける覚悟をしている。その深い家族愛に感動し、また自分の視野の狭さを気付かされた。

高次脳機能障害の男性。事故から一命をとりとめたが、感情の抑制効かず家族と口論、暴力行為が続いた。男性の母と話したとき、「事故のとき死んでしまえばよかった」「俺なんかいない方がいい」と言われた時は本気で殴り、涙が止まらなかったと言われた。　このことは私に家族のありがたさについて考える機会を与えてくれた。今生きていること、絆や愛情というものについてこれからも自問自答していきたい。

脳梗塞を、何度も再発されている患者様。ある日、リハビリ中に、意識レベルが低く、思うように歩けない患者様を見て言われた一言が、非常に印象に残っている。「あんなになっても、生きんといけんのかなぁ。」何度も苦しい思いをしてきたからこその言葉だと思う。その日から、「生きる」ということについて考えながらリハビリをするようになった。職業としてだけでなく、人間としても頑張っていきたいと思った。

中等度の認知低下があり、最初は在宅方針であったが、最終的に施設方針となった患者様。同居の家族は病弱であったが、なんとか家に連れて帰りたいとの意向あり。チームでは在宅復帰は厳しいとの考えあるも、家屋訪問を行い、生活設定について話し合いを重ねる。最終的に施設方針となり、私は、在宅方針を叶えられなかったことに対して、これでよかったのかと考えさせられた。しかし退院日、ご家族より「ご自分の事のように考えてくださり、本当に感謝しています」等の内容が書かれたお手紙をいただく。このことから、患者様・ご家族の立場に立って心情の変化を理解し、支えようとすることが大切と改めて実感した。

発症以前は、スポーツなど活発に過ごされていた壮年期の患者様。入院中は、気持ちの落ち込みが強く、リハビリも消極的であり、笑顔などなかなか見せていただけなかった。退院が決まり、普段より落ち込まれていた。しかし、いざ自宅での生活が始まってみると、あれほど辛そうであったあの方が、「何とかなるもんだよ」と笑顔で家族と会話をされ、自立した生活を送っている。在宅生活、家族の関わりの大切さを実感し、入院中に自分にまだ何か出来たのではないかと振り返る機会となった。

発症前、畑で野菜を作っておられた経鼻流動の患者様。発語はなく、意思伝達することも十分にできず、笑顔はあまりみられない方だった。ご家族も本人がなにか伝えたいのは分かっているが、分かってあげられないことに悔み、涙を浮かべておられる場面を何度か遭遇した。発症して以来初めて、摂食練習で食物を口にした際、患者様が満面の笑みを浮かべ、それを見たご家族が「よかったね」とうれし涙を浮かべられた。その姿を見て、うれしさと同時に改めて自分が関わっているリハビリの重さを実感した。

60代で脳梗塞の後遺症を与えられた女性の一言。「私は本当にいい縁に恵まれている」与えられた試練より頂いた縁に恩恵を感じているこの一言に一瞬戸惑いを覚えた。いつも笑顔を絶やさずに悲観的なことを口にしないこの方の、毎日仏様に拝み続ける姿に、人の心の強さと自分のふがいなさを痛感させられた。

在宅は難しいとされていた患者様。家族はそれでも自宅を希望されていた。家族は、「少しでも自宅に帰してあげたい」という気持ちが強く、患者様は認知症がありながらも「家族のことを考えると施設がいい」と施設を希望されていた。家族も患者様も自分の意思ではなく、その人を思っての決断をされたことに心を打たれた。結果として、施設となったが、本当にこれでよかったのか、家族、患者の意思をしっかり聞くことが出来たのか。他の方法はなかったのかなど多くのことを考えさせられた。

入職してから今まで、脳卒中を発症し、後遺症の残る患者様を数人担当させていただいた。その中でも、一番初めに担当させて頂いた脳血管疾患の患者様。不安だった。初めて、病棟自立となった当日、脳梗塞再発し、転倒。自分の責任だと強く感じた。意識も朦朧としている患者様の顔を覗くと、「また、戻ってくるから、担当お願いね。」心から嬉しかった。患者様の優しさを強く感じた。同時にこのままでは、いけないとも思った。このことが、今も自分の心の糧となっている。

いつも笑顔で明るい性格の左片麻痺の患者様。ある日、居室に行くと嬉しそうに「この病気になって初めて左手でコップを持つことが出来ました。」と涙ぐみながら話して下さった。明るく振舞っていたが不安や恐怖と闘っていたのだと感じた。患者様にとって何が喜びや生きがいになっているのかを考えさせられたとともに、患者様の小さな変化や気持ちに気付けるPTになりたいと思った。

脳梗塞発症後に一度は自宅退院したものの、転倒による骨折で再入院された患者様。ご本人は自宅退院を強く希望されていたが、ご家族の意向は違うものであった。歩行が安定して行えるようになった頃、「また歩けるようになったことは嬉しい、だけどまた家族に心配はかけたくない」といったことを言われ、ご本人が施設を検討していることを初めて知った。前回の退院時に自宅に戻れることをうれしそうに話していた方だけに、家族に迷惑をかけると自分を責めたてる姿からは悔しさ、無念さが伝わり、胸を打たれた。

○壮年期の方。麻痺が重度。医師より後遺症が残ると説明を受け、「それはある程度分かっている。障害に固執してしまうつもりもないが、蒔いた種からは、その花が必ず咲く。人生もきっと同じで、どれだけ種を蒔いて、しっかりとそれを育むか。辛いことがあっても努力すれば必ず先々結果となり、自分の糧になる。」と話をいただいた。自分のおかれている状況に対して、不安や憤りを感じる一方で、それにも負けない強い意志・想いを持ち続けて「生きる」ことを頑張っている姿に強く感激した。自分ももっと自分の人生のことや考えをしっかり持たねばなと改めて感じた瞬間であった。

○寝たきりでコミュニケーションも不可能なご主人の妻。毎日見舞いに来て、声をかけ、顔を拭いて、いろいろな音楽や写真を見せ。「夫がこの病気になって、辛いけど、改めて夫に素直にありがとうと言える。この人と出会った自分は幸せだなとつくづく感じる」と。病気など悲しみを超えるだけの「愛」の強さを感じて、人が人を想うことのすばらしさに感銘を受けた。

重度片麻痺の50代の女性から退院前に「この病気のせいで、夫を支えることができないのが悔しい」と。自分よりも夫が先なのかと衝撃だった。「生き様」と「らしさ」が分かり、画一的なアプローチとゴール設定しか出来ていない自分が情けなかった。夫婦の絆を感じつつ、もっと自分自身が、その人その人に真の目標設定が行える理学療法士になりたいと思った。あと、夫が少し羨ましかった。

70歳代女性。下肢の骨折で中等度の認知症あり。状況判断能力が不十分であり、フットセンサー対応。髪が長い方で、リハ前は寝癖などの髪型の乱れを整えてから行くように注意していた。ある日、「みなさんリハビリはされるけれど(指導できるけれど)、そんな所(髪型)まで気をつけてくれるのは貴方だけ。」と言われた。リハビリ以外の対応の仕方や目配り・気配りの姿勢まできちんと見られているのだと痛感した。それ以来、自分の櫛を準備して、より注意するようにしている。

長期間の廃用症候群により、起居動作にも全介助が必要な大柄な男性患者様。初めてのリハビリで座位練習のために、座位まで介助で行った。夏の暑い日で、後ろから奥様が私をうちわであおいでくださった。「暑いのに重くて大変ね。ごめんね。」と泣きながら言われた。奥様にとっては起きるのにも介助が必要なご主人を目の当たりにし、愕然とした瞬間であったと思われるが、その際に出たスタッフに対しての気遣いの言葉に、胸をうたれた。

○交通事故で高次脳機能障害が残存した若年者。「学校に行きたい」「友達と話したい」と通常なら普通に得られる希望がなくなったという。不安で苛立ちがすごいというが、「当たり前を幸せに思う、感謝」と一言。不満、不平をついロずさむのが恥ずかしくなった。予期せぬ発病でそのような気持ちには私はなれないなと思った。

○子供を片親で育てた患者さんの家族（子供）。「必ず自宅に連れてかえる。生きているのが奇跡。だから大切にしたい」と。今までの感謝と敬意との事。家族の大切さや重要性は私にも分かるが、私ならここまで強く決意ができないと思った。家族が障害を得てより感じる事であると思うが日々の私の振る舞いをもう一度見直していくきっかけとなった。

初めて持った脳梗塞の患者様。患者様も初めてのことばかりで不安も強く、よく質問を受けていました。知識も経験もまだまだ分からないことだらけのことが多く、質問に即答できないことも多々ありました。自分なりに考え、分かる範囲で、なるべく不安を与えないように答えていました。患者様が、退院される際に、「困らせることばっかり言ってごめんね。でも、あんたが担当で良かった。」と涙されました。本当に、迷惑ばかりかけましたが、自分なりの誠意を持って対応したことが、患者様に受け入れられたのかなと思います。患者様に受け入れられることこそが、今の仕事を続けていられる理由だと思います。

「あの時は主人のことしか考えられませんでした」
六年前に担当した患者様の奥様から最近言われた言葉。この言葉を聞いて当時の奥様の心細さや自分がしっかりしなければという気持ちを改めて実感するとともに、その後お二人が乗り越えてこられたことに思い至り、現在はその時の状態からは想像できないほど毎日の生活の中に楽しみを見出していることに感動を覚えました。どの段階で関わるにしても家族も含めて前向きに生活していける援助を心掛けたいと思いました。

「俺が聞きたいのはそんな理屈の通ったことじゃない」
パニック障害があり、リハ拒否のある患者様をPTに誘導しようとした際に言われた一言。ご本人に歩行練習の必要性などの説明をしたものの、拒否が続く状況であった。
よく話を聞くと、ご本人はPTの必要性などについては理解されていたが、そのことよりも、強く感じる将来への不安について話を聞いてもらいたい、不安が和らぐような話をしてもらいたい気持ちであった。患者様の求めるものは何かをよく考えて対応することの重要性を再確認させられた。

「夫が待っているんです。」頚椎症とパーキンソン病を呈した患者様の一言です。入院に対するストレスから今すぐに退院したいと訴えられた。しかし、現在の能力では在宅生活は困難である状態であった。そのような時に上記の一言を言われ、患者様を知ることは単に、機能面、ADLだけではなく、家族などの背景因子も常に頭に入れて関らなければならないということを改めて感じました。そして、「能力が改善する喜び」を感じることのみならず、「夫と共に生活できる喜び」という紙面ではゴールとして記載されない部分のゴールがあることも感じました。

○元敏腕営業部長、「元気な時は部長として仕事をしていた。その時は人の気持ちなど気にもしたことがなかったでもこの病気（脳梗塞）になって、自分の辛さを通して人の気持ちを考えるようになった。そしていかに今まで傲慢だったかに気付いた。そういう意味では病気になってよかったと思う。」ものの見方や価値観がいかに大切かということに改めて気付かされた。

○脳出血の息子（20代）を持つ母親「この子はとても優しい子、いつも人のことを気にしている。病気になった事は残念で悔しい。今は障害があるからといって家に閉じこもっている時代ではない。本当に優しい子なのでこれからの人生大変だとは思うが、不幸になるとは思わない。」と涙ながらに語られた。子供の病気を心配する母親の気持ちに接し、幸せのあり方というものを改めて考えさせられた。

60代前半の患者様で退院後２年ほどしてから、当院に遊びに来て下さり、「小倉リハでの３ヵ月間は新しい出発に向けての助走のようであった」と話された。入院中は「まさかこんな事になるとは」とよく言われていた。障害を受け入れるまでにかかる時間についてや、発症しつらい時期を一緒に過ごす際の関わり方など作業療法士としての自分の関わり方を考え直す機会となった。

症状の進んだALS診断患者に入院前面談を行った際、「最期の時まで自身の望む形での生活を希望したい。無駄であっても、そのために入院でのリハを希望したい。」とのコメントが聞かれた。この面談で、最期の時を目の前にした人間の強さを学ぶとともに、そういった患者が抱く希望を医療機関が支援するという重要な役割を担っていることを改めて認識した

訪問や担当者会議など御自宅へ伺ったり、ご家族様と話す機会があり、その際、デイケアでの活動場面ではみられない利用者様の姿を見る機会が多くあります。
認知症・重介護の方でも自宅では家族の協力もありますが、夫や妻、親としての役割を持ち、また、私たちをお客としてもてなす心がけなど家族と過ごしている利用者様の表情・活動の違いを日々、実感しています。実際に目の前にして、日々のデイケアでの私たちの役割や関わり方など考えさせられ、また、仕事に対する意欲に繋がっています。

その方は、何とか自立歩行はできるが廃用手となり、また自覚しながらも軽度の高次脳機能障害を呈している。生活保護を受給しながら、知的障害と精神疾患を抱えた娘2人と暮らしている。その方は自らの身体の痛みや体調不良を認めながらも、娘を散歩に連れ出す等の世話は欠かさない。常に笑顔で、スタッフに対しても明るく振る舞う。涙を流している姿を見たことがあるが、スタッフに気付くと何も無かったかのように笑う。自分がそんな境遇におかれたらこのように他人に気遣い、笑顔でいることができるだろうか。

40代の進行性疾患の方。症状の進行等に伴いサービス変更や生活設定の見直しを行っている際、「危険だという事はわかっている、やめる事は簡単だけど私はこの先何もできなくなってしまう。病気になった事を悔やんでもう十分泣きました。死に際にやらなかったことを後悔するより、危険を伴ってでもいろいろなことにチャレンジしていきたいんです。」と言われた事。生きるということや自分の専門職として支援していく事や幅の狭さについて考えさせられました。

独居にて在宅生活を送られている片麻痺の80歳代の女性の方が、調理はほぼご自分でされている。『料理は楽しみで、生きがい。私はあんまり歩けないし、人の助けもいるけど、料理においてはまだまだ娘や若い人には負けない。』と言われていた。在宅生活を続けていくなかで、生きがいがあり、それを継続していくことの意味を強く感じた。

○今年初めの利用者同士の会話。退院後デイケアを利用されている方で、病気をしてから歩くことが不自由になり、少しづつ回復し屋外まで歩けるようになった。正月前に孫や子供たちから「やっぱり、おばあちゃんのおせち」と言われ、嫁に手伝ってもらいながら作れたとのこと。「歩行能力の向上」が目標のデイケアプログラムであったが、家庭での「役割」まで入り込めていなかったと反省させられた言葉でした。

○回復期退院後、当院デイケアを利用されている男性。リーダーとして関わっていた。身体的には歩行自立まで改善したが、本人の表情は入院時からずっと不安そうなものであった。業務終了後や合間に居室へうかがい、つまらない内容でも「話す」ことを意識してかかわった。2年以上経過し、私自身が地域リハ部配属となったある日のエレベーターの中で、笑顔で言われた言葉でした。「あんた」という言葉の響きが心地よく感じ、本氏にとって、治療者だけの関係だけではなく＋αの関わりができたのかなと思った。

施設方針の男性入所者。本人の我侭な言動もあって家族との関係は疎遠となるが、そんな中でも強気な発言ばかりして人には弱気を見せなかった。しかし、認知症の進行とともに周囲への関心を徐々に失い、お喋り好きだったとは思えないほど無口になっていった本人が、ある日の談話の中で、ふと家族の写真を見て、妻や子供、兄弟を指差し、名前を連呼する場面に遭遇した。一言ぽつりと「さみしい」と呟いた本人の姿がとても悲しく映り、孤独を感じてきた本人の心と、家族との触れ合いの大切さを痛感した。

認知症が中等度ある療養者。新年会の際、料亭のお膳が出されたが、その方は「娘にあげたい」と全く食べようとせず、伸寿苑の玄関ばかり見つめていた。「娘さんは間に合わないかもしれないから」とスタッフが話すが、聞き入れず待ち続けていた。新年会が終わりかけていた時、娘様がやっと来られ、大変笑顔になり、娘さまがそばで見守っている中食べ始めた。その日の午後、リハビリを行った際に「娘さんをずっと待たれてましたね」と話すと、「当たり前のことよね」と話した。その言葉を聞いて、例え認知症が進行しても子を思う母親の気持ちは変わらないのだなと、心温まる想いがした。また、この方の子供に対する愛情・育て方が想像でき、自分もこの方のような母親になりたいと感じた。

障害受容の難しさについて深く考えさせられた時の印象的な言葉です。機能的には実用的な歩行は困難でゴールと考えられる女性と、今後の在宅の生活について話し、車椅子の使用を勧めていました。
そのとき「私はここに入所する前のように、歩いて帰る。健康なあんたには私の気持ちはわからない」と言われました。自分の無力さを感じ、何も言えませんでした。

在宅復帰された女性入所者の夫。奥様は重度の麻痺・失語症・うつ病のため常時見守りが必要な状態で夫も自らの会社があり、施設側として在宅復帰は難しい状況と説明する。しかし、夫は在宅復帰を希望され『今まで自分がどれほど迷惑をかけたかわからない。これからは自分が恩返しをする番だからね。』と笑顔で話された。退所後訪問の際、これまで妻に全てを任せてきたため夫が不器用ながらも家事をこなしている姿を見て感動し、同時にもっと自分には何か出来たのではないかと無力さも感じた。

施設方針の男性入所者の妻。介護負担が増し、家族の勧めにて自宅復帰困難として入所。入所後もほぼ毎日妻の面会あり、熱心に食事介助等も行なっていた。入所から約半月経過した頃、妻が思い詰めた顔をしていた為、話をすると「やっぱり何とかしてお父さんを連れて帰りたい」との発言有り、方針をチームで再検討し、自宅復帰へ方針変更。その時の妻の顔は希望に満ち溢れており、家族に対する思いの強さに心を打たれた。家族の言葉だけではなく、日々、表情の変化も感じ取る観察力が大切だと感じた。

○認知機能の低下を主に病前の独居生活を送ることが困難であった80代の男性。リハ経過と共に認知機能の改善を認め、いよいよ転帰先の決断の時。施設方針を理解しつつ、長女からの「どうする？」の問いに「何処でもええよ。」の返事。その声は決して嫌みや諦めの言葉ではなく、家族のことを思うが故の素直な気持ちの現れと感じた。私達は単に生活拠点を決定することではなく、時に人生の最後の場所を決断する重要な場面に相対している事を再認識した。

○一時は社長として天国を見た。事業失敗により、会社は倒産。住居そして家族を無くし、挙句、脳梗塞発症にて生活保護を受給。自身の現状を地獄と表現した60代の男性。これからの生活に自暴自棄になり、意思表示をしない状況に時に親子とも離れた医療相談員と討論寸前の面接を繰り返す。退院の時、彼は次の施設へ向うことに。目に涙を溢れんばかりに浮かべ無言の握手を医療相談員と交わした。約1年後突如男性が来院。痩せた表情も笑顔で医療相談員のもとに。人生のレールは続いていることを確信した。

患者さんと社会的な役割の話をする中で、病前の生活においてボランティア活動（NPO法人の立ち上げから関わりを持つ方）を積極的に行われている方であり、仕事からリタイアしたあと自分を奮い立たせるものは何なのかを尋ねてみると、今までやってきた仕事に対する誇りが自分を奮い立たせているとのことであった。この話を生き生きとした表情で話される姿を見て、この方のチャレンジスピリットを見習いたいと思うと同時に、自分の仕事に対し、自分の人生の中で誇りが持てるよう日々邁進していきたいとあらためて感じさせられた。

○重度の障害を負いながら一人生活を選択し、前向きに生きようとする若者。これまで声をあげて泣く情景に２回出くわす。１回目は皮膚の病気を長い間放置し入院したとき、２回目は「もう少し生活を見直したほうがいい」といわれた時。情けなさと切なさと悔しさの涙と思った。誰にも迷惑をかけず一人で生きている、それだけで100点満点だ。私には障害を負って一人で生きていく勇気や信念はない。

○終末期にある高齢者。すべての人に手を合わせ感謝する姿に、死の恐怖を直前にあんなにやさしくなれるのか、私もそうありたいと感じ、そうなれるかと自問自答した。

○一人で2500人の従業員を抱える会社を立ち上げた人。不慮の事故で四肢麻痺をおう。入院時1回だけ事故への後悔を口にする。「こうありたい」「こうあって欲しい」と思う気持ちを持ちながらも口にせず、若い未熟なスタッフにも丁寧な対応をする。金銭的にも恵まれ、妻子もいるが自ら終の棲家として施設入所を決めた。真摯さと強さ、潔さに感動し私もそうありたいと思った。